

日本比較文化学会中部支部
令和2年度例会
発表抄録

日時 令和3年 3月28日(日)

会場 浜松学院大学布橋キャンパス

日本比較文化学会中部支部

日本比較文化学会 中部支部 令和2年度例会

I 例会日程 令和3(2021)年3月28日(日)

II 例会スケジュール 13:00~16:30

○12:50~ Zoom 会議受付

○13:00~ 開会の挨拶(中部支部長:白鳥 絢也)

○13:05~ 研究発表

○16:20~ 総会

閉会の挨拶(中部支部副支部長:津村 公博)

※オンライン発表へ参加される方は、発表開始時にはマイクをミュートにして臨んでください。(発表者を除く)

※同じく、カメラでの顔出しもご遠慮ください。(発表者を除く)

※同じく、発表の録画はご遠慮ください。

コロナ禍におけるオンライン授業のあり方に関する研究

－「教育課程論」及び「国際文化論」受講生の意見を参考に－

白鳥 絢也（常葉大学）

本発表では、筆者が担当する教職課程科目「教育課程論」及び全学共通科目「国際文化論」の内容や構成を省察し、コロナ禍におけるオンライン授業のあり方について模索する。また、受講生の具体的な声を紹介することにより、現代の大学生の思いや願いについても触れていく。具体的には、両科目の受講生が記載した「本オンライン授業の感想及び全体を通しての要望」の記述の分析を行った。分析には、テキストマイニング・アプリケーション KH Coder 3 (Beta.01h) を用いた。これにより、受講生の要望を明らかにするとともに、今後のオンライン授業の構成や内容について示唆を得たといえよう。

受講者の記述の一部は、以下の通りである。

- ほかの講義のオンライン授業は「またか…」と少し憂鬱になっていることもありましたが、教育課程論はスライドはわかりやすく、コメントシートは先生のユーモア溢れる返信と他の方のコメントに刺激されてモチベーションが高まりました。
- いつもスライドがわかりやすく、画像やイラストを見ながら楽しく学習ができました。コメントシートを読むのも毎回楽しみにしていて、こんな風に考えている人がいるんだ、こんなことに着目して自分で調べた人がいるんだと感化されました。先生のコメントも面白くてすごく良かったです。
- 先生が出してくださっていたコメントシートを見ると、毎回周りの友達の意識の高さに驚き、それと同時に自分ももっと頑張らなければならぬと感じさせてくれました。また、新しい発見が毎回見つかりとても面白かったです。先生のコメントも毎回楽しみにしていました。
- コメントシートでは、自分では気づかなかったことに気づけたり、みんなや先生の考えや思っていることが知れてよかったです。
- すべての回で、先生のスライドがおもしろく、また量も多すぎず、楽しく学ぶことができました。毎回、楽しみにしていた講義です。
- 先生の授業のコメントに対する返答が丁寧であり、自分も先生のコメントを頂きたかったので、よく資料を読んで質問させていただきました。そのため大変授業の理解が深まりました。
- レポートの書き方講座はあったら良いなと思います。説明がないままオンラインで急に「レポートを提出してください」と言われた授業もいくつかあって戸惑ったからです。
- どの授業でもレポートの書き方が無いままレポート課題が出て、書き方が違うといわれてもどうしようもないので「レポートの書き方講座」は本当にやってほしいです。
- オンラインでレポートを提出したときに先生方からの返信がないので、自分のレポートがどのように評価されているのか、着目点はどのようなのか分からず不安であるので一言でいいので返事がほしい。
- レポートや課題の評価等を確認できるようにしてほしい。レポートや課題を出したっきり評価をもらったことがないので、どのように次から改善して提出すればいいのか、良い評価か悪い評価なのかどのような評価かもわからずモチベーションにもつながりません。
- 評価基準や内容の定着度の確認が難しいからだとは承知の上で、課題が多すぎるように感じました。こなすことで精一杯になってしまっていたので、「国際文化論」のようなスライドとコメントシートの方式が自分の理解度に合わせて学習できると思いました。

※下線部筆者

コロナ禍における大学教員の海外出張

－問題点と事例－

樋口 謙一郎（相山女学園大学）

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、日本の多くの大学で教員の海外出張（業務としての海外渡航）に制約が生じ、調査研究や学生引率などが困難になっている。本発表では、その問題点を整理し、コロナ禍における発表者の出張事例を紹介する。

感染症の拡大防止の重要性は強調して余りある。しかし一方で、感染防止策により大学教員の海外出張が制限されることにより、研究、教育の両面において多くの支障が生じることも事実である。

研究面においては、海外調査を含む研究が困難になることはいうまでもないが、特に公的研究費による研究が停滞することにより、研究者は研究成果をあげることの責任・使命感の点で不安を持つことになる。日本学術振興会の科学研究費助成事業（科研費）が基金ではなく補助金である場合、1年単位で研究費が供されるのであり、繰越申請制度は存在するものの、実際には制度の活用には相応の労力を要する。2020年度、補助金の繰越が可能とされたのは10月に入ってからであったが、コロナ禍のように各国が入国を制限するような事態においては、より早い時期に半年ないし1年単位の繰越が認められることが望ましい。

教育面においては、学生の海外留学・研修が不可となることはやむを得ないことだとしても、カリキュラムにおいて留学や研修が重要な地位を占めている場合にどのような対策を講じるのべきか、協定校との関係をいかに維持するかといった点については問題が多い。大学によっては、上層部で方針が決定されるものの、それによってもたらされる負荷は、留学や研修にかかわる一部教員が主に被るということもある。

これらの問題を俯瞰した上で、発表者の2020年度の海外出張事例について紹介したい。発表者は、コロナ禍においても夏季に英国における調査、イタリアにおける学会発表、そして冬季には韓国における調査を慣行した。その際、いかなるコストが投じられたのか、すなわちいかにして発表者は海外出張を成しえたのかについて述べ、最後に、コロナ禍においてなお海外出張を実施することの意味について考察したい。

虚構と現実の狭間で ——隠喩が機能しなくなるとき——

川口 雅也（浜松学院大学）

文学という虚構において隠喩が果たす役割は大きい。現実の世界において隠喩が隠喩でなくなるとき、作り手の意図はどうなるのか、作品の意味はどうなるのか考察する。

テレビシリーズ *Star Trek: The Next Generation*(1987-93)における一つのエピソード “The Offspring” (1990)の主人公は人間ではなく、アンドロイドの Data である。この作中人物に関して原作者の Gene Roddenberry は彼に欠けているものこそが重要であるという趣旨の発言をしている。彼に欠けているものとは感情である。そのような存在と自身とを比較しながら、視聴者は人間とは何か、何が人間を人間にしているのかという人間の条件について考えさせられることになる。「子孫」と題されたこの物語の中で、データは理想的な父親として振る舞う。理想的な父の隠喩としてのデータの言動は、人間の父親の在るべき姿を視聴者に見せてくれる。

ところが、現代社会において AI はデータほどには発達していないながらも、実際に存在している。そんな今を生きている視聴者にとっては、データは近未来の完成形の AI の姿に他ならない。そんなデータの实在感は、彼を理想的な父親の隠喩として見えにくくしてしまう。作り手の意図であったであろう、人間の条件の提示は、今の視聴者には伝わりづらくなってきている。それは、作り手が作品に込めた意図と、受け手が作品に見出す意味の乖離が生じているということだ。

テレビドラマという虚構の世界にあって隠喩が機能しなくなるとき、また、それに伴い作品の意図が視聴者という受け手に伝わりにくくなる時、人間の姿を描くという文学的価値は減じることになるのか。意図と意味は一致すべきものなのか。そうではない。テレビドラマ、テレビ文学に限らず、文学は作り手と受け手、両者が存在して初めて作品として成立する。文学において意図は意味を限定するものではないのである。むしろ、多層的な意味をもつ文学に新たな意味の層が加わり、文学的価値をより一層高めていると言えないか。それはすなわち、時代、文化圏に関わらず作品の価値が受け手に認識されるという文学の普遍性をよりいっそう豊かなものに行っているといえるべきであろう。

「講」^(注)を源流とする西三河のカラオケ喫茶

大崎 洋（愛知大学総合郷土研究所）

2020年度は、西三河のカラオケ喫茶20軒を訪問調査した。コロナ感染拡大防止に伴う自粛営業期間もあり、ほとんどのお店は、公共施設での歌謡祭は中止・延期となった。店内でのイベント（歌謡祭など）は一部のお店を除いて自粛しているが、通常営業のお店は、感染予防に万全を尽くしていた。

2020年6月中旬、かつて無尽講の講員であった、田原市のカラオケ喫茶の経営者から次のような話を伺った。

「もう40年位前になるが、町内で構成する、無尽講の活動で薫ぶきの屋根の薫の取り換えや大家族の布団の購入・搬入が終わった後は、当番の人の家で講員が集まり、懇親会を行うのが恒例だった。そのうち、講員も高齢化し、酒量も減ってきた。家庭での懇親会は準備が大変なので、懇親会は、喫茶店へお茶を飲みにいこうという話になり、そのうち講員の中から喫茶店を開く人が出てきた。しばらくしてその店でカラオケを歌いたいという声が多くなり、カラオケ喫茶に模様替えした。」

現在、そのカラオケ喫茶は閉店しており、話を聞くことができないが、この時、カラオケ喫茶と「講」は何か繋がりがあるのではないかと、時の流れを経て「講」からカラオケ喫茶にゆるやかにシフトしていったのではないかとという問題意識をもち、西三河地域に現存する講（信仰的機能をもつ講・社会的機能をもつ講・経済的機能をもつ講）を調査するとともに、カラオケ喫茶の訪問調査をした。

まず驚いたのは、モーニング戦争ともいえる各店のモーニング・サービス（コーヒー・パン・ゆで卵＋サラダ・フルーツ・ヨーグルト・煮物・うどん・お菓子など）の競争であり、元気のいい70代を中心とする高齢が集い合い、活気溢れた楽園といえる場所であった。

現在の「講」について、宗教的機能をもつ「講」以外は、多くが「講」の機能を停止、活動を縮小している。しかし、かつての「老年講」が進化した、社会的「講」を源流とする「カラオケ講」ともいえるものであることを確認した。

注「講とは、宗教上もしくは経済上その他の目的を達成するために、志を同じくする人たちの間で組織された社会集団の一種」桜井徳太郎『結集の原点－共同体の崩壊と再生－』弘文堂1985. p191

ドイツの対外言語普及の新たな視点 — 「複言語・複文化主義」の発想からの考察—

山川 智子（文教大学）

本発表では、ドイツの対外言語普及の考え方を、欧州評議会が提唱する「複言語・複文化主義」の視点から検討する。その際に、ドイツの国際文化交流機関の一つであるゲーテ・インスティトゥートの活動の一端を振り返る。そのことにより、負の過去を持つドイツがどのように近隣諸国からの信頼を得ようとしたか、国際文化交流とドイツ語普及の連環を示しつつ考えたい。さらには「複言語・複文化主義」の発想が言語普及政策に資する意義を深めたい。

「複言語・複文化主義」とは、個人の言語使用や文化体験に焦点をあてる考え方であり、社会に焦点をあてる「多言語・多文化主義」とは異なる概念として欧州評議会にて提唱された。言語に対する心のあり方や姿勢を一人ひとりが見直し、「相手を理解したい」という気持ちを持つことで異言語・異文化交流が促進されようとするのが「複言語・複文化主義」の考えである。

様々な言語的、文化的背景を持つ人々がドイツで暮らしはじめ、受け入れる側が共生に向けてどのように工夫していくかが問われている。異なる価値観や習慣を持つ人々への偏見を少しでも減らすための解決策を考える際、「複言語・複文化主義」の発想が助けになる。ドイツはナチ支配の過去があるため、イギリスやフランスに比べて、自国の言語を普及することに困難が伴った。こうした事情があるので、現代のドイツが行っているドイツ語普及を「複言語・複文化主義」という視点から考え、新たに位置づけることが必要である。植民地主義的なものではなく、負の過去を背負って卑屈になるのでもなく、普及する地域の人々を尊重しながらドイツ語を使用し、普及していくという姿勢は、他者を理解する目を育む「複言語・複文化主義」の本質に通底する。

次世代へ歴史を語り継ぐという文化的・政治的営みを続けることで、ドイツは国際社会の信頼を取り戻しつつある。それに伴い、ドイツ語普及にも新たな意味づけが加えられようとしている。国際文化交流の基本は、一人ひとりの言語と文化の向き合い方にある。異文化理解の本質を問う「複言語・複文化主義」に関しても、その都度、議論を重ね、各々の理解の中から共通理解を見出していきたい。

マレーシアにおける孔子学院の現況とその意義に関する一考察

二村 洋輔（海陽中等教育学校）

中華人民共和国がその言語・文化の対外的普及を目指して 2004 年に設立した孔子学院は、それ以降急速に世界中に拡がり続けている。2020 年までに、世界 162 カ国に 540 の孔子学院と、1154 もの孔子課堂（高等教育機関以外に設置された施設）が存在しており、日本国内には 15 校の大学に孔子学院が設置されている。本発表では、マレーシアにおける孔子学院の現況の報告と、多民族・言語国家であるマレーシアにおけるその意義の考察を行う。

マレーシアにおいては、2009 年のマラヤ大学における設立を筆頭に、2015 年にセギ大学、2019 年 10 月にはマレーシア・パハン大学、12 月にマレーシア・サバ大学、ユニバーシティカレッジ・サラワクに立て続けに 5 つの孔子学院が設立された。多少の地域の偏りはあるが、2019 年の 2 つの大学での新設により、西（半島部）・東（ボルネオ島）マレーシア両方に孔子学院が進出してきたことになる。

孔子学院の運営には、1) 中国サイドが運営する、2) 現地のパートナーと共同で運営する、3) 中国からのライセンス認証を受けたうえで、現地の機関が運営する、という 3 つの方法があるが、マレーシアでは 2 番目の方法が採用されており、マレーシア国内の大学が中国国内の大学と協定を結び、運営にあっている。

マレーシアは多民族・言語国家であり、その言語・教育政策には長年腐心してきた。特に、国民の約 23% を占め大きな存在感をもつ「マイノリティ」である中華系マレーシア人の言語・文化に関するものについて、世論においても対立がみられる。

しかしながら、これまでのところ標準中国語と中国文化の対外普及を図る孔子学院はマレーシア国内において概ね友好的に捉えられている。その一つの要因には、1980 年代の第 1 次マハティール政権以降続くマレーシアの「アジア志向」と、西洋中心主義への懐疑心が挙げられるだろう。

アメリカでは対中関係が悪化するにつれて近年孔子学院の閉鎖が相次いだ。マレーシアにおいては今後もこの関係性は継続し、国内における（標準）中国語やその文化の教育・研究の地位向上に貢献するだろう。今後の研究では、現地調査を行い、より詳細な孔子学院の実態の分析につなげていきたい。

ラフカディオ・ハーンと映画 —小林正樹監督「黒髪」における復讐の表象

風早 悟史（山陽小野田市立山口東京理科大学）

本発表では、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) の「和解」(“The Reconciliation,” 1900) と、その映画版である小林正樹監督の「黒髪」(1965) を取り上げ、復讐の主題に焦点を当てて比較考察を行う。

『今昔物語集』の中の一話を再話したハーンの「和解」は、タイトルの通り、夫婦の和解の物語として読むこともできるし、反対に、妻から夫への復讐の物語として読むこともできる。このような原作の曖昧性に対して、小林監督の「黒髪」は、復讐のテーマを前景化し、それを映画ならではの表現で具体化している。ハーンの「和解」研究では、復讐よりも和解の解釈が支持されており、その中で小林監督の翻案は貴重な例だと言える。

「黒髪」を含む小林監督のオムニバス映画『怪談』は、第18回カンヌ国際映画祭で審査員特別賞を受賞するなど、批評家からも高い評価を得たが、これまでハーン研究として取り上げられることはほとんどなかった。ハーン作品、とくに日本で書かれた怪談ものは、何度も日本語に翻訳・翻案され、多くの読者に親しまれてきた。本発表は、映像作品の分析を通して日本におけるハーン（小泉八雲）像の形成と変遷を探る研究の一環でもある。

※ 本発表は、JSPS 科学研究費助成事業若手研究「日本でのラフカディオ・ハーン像の形成において邦訳が果たす役割」(18K12351) の助成を受けたものである。

文化財の保存とその活用－文化財保護法改正を地域経営から考察する

－国指定重要無形民俗文化財「川名ひよんどり」の事例から－

田島 喜代美（浜松学院大学）

背景

過疎化・少子高齢化により、浜松市内では多くの文化財の滅失が課題となっている。国は、「指定を含めた有形・無形の文化財をまちづくりに活かしつつ、文化財継承の担い手を確保し、地域社会総がかりで取り組んでいくことのできる体制づくりを整備」を目的に、文化財保護法を改正した。これは、国による地域の文化財を観光地域づくりの一環として活用し、ひいては継承者の育成も視野に入れた方策である。

目的

本研究は、浜松市北区で 600 年間、継承されてきた国指定重要無形民俗文化財「川名ひよんどり」を事例として、2014 年に文化財保護法に先駆けて、地域の文化財の活用を目的とした設立された NPO 法人「かわなの里 ほぐせんぼ」について、地域経営の視点から改正文化財保護法の効果と普及について検証していく。

方法

地域の文化財保護を目的とした保存会、地域の文化財のまちづくりへの活用を目的とした NPO 法人、基礎自治体関係部署等への調査を実施した。

1. 「川名ひよんどり」の祭礼等の参加観察
2. NPO 法人「かわなの里 ほぐせんぼ」へのヒアリング
3. 浜松市文化財課、土地政策課へのヒアリング
4. 浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会 へのヒアリング

結果

平成 31 年 4 月施行の改正文化財保護法は、「文化財を保護する」ことに加えて「文化財を活用する」ことに力点が置かれている。これは、文化財の保護の中心から保存と活用の両立への大きな転換となる。その中で、既存のまちづくり事業のなかで「文化財を保護する」地域の伝統芸能の保存を中心とした地域活性化の取組みは、その財政基盤体制の構築の難しさにより、組織存続の問題など、多くの課題を内包していることがわかった。地域の文化財の保護と活用を目的とした改正文化財保護法の運用については、今後慎重に検討する必要がある。

外国につながる子どもの教育の新しい視点 ーフィリピン共和国教育省 RegionXIとの教育連携の事例から

津村 公博（浜松学院大学） 田島 喜代美（浜松学院大学）

背景

浜松市内の日系フィリピン人の子どもは、来日前は地域の共通言語であるビサヤ語、教室言語・公用語であるタガログ語、英語の3つの言語を習得しており、本来高い言語習得能力を保持している。しかし、来日後は、いずれの言語も喪失する傾向があり、文化的アイデンティの低下が見られ、学習意欲の低下につながっている。

目的

本研究は海外につながる子どもの学習の動機付けをすることで、高い言語習得能力と、文化をまたぐ多様性のある環境を生かし、日本と世界をつなぐ「グローバルリーダー」として育成するフレームワークを構築することである。

方法

具体的な方策として、フィリピン共和国ダバオ市及びその周辺地域を管轄する教育 RegionXI と協働し、ダバオ市内の公立学校と浜松・横浜市内の教育機関に在籍する海外につながる子どもを対象に ICT を活用した「グローバルリーダー」を育成するクラウドプラットフォームを構築する。

結果

フィリピン共和国教育省 RegionXI と現在試験的に実施している「グローバルリーダー」育成を目的としたクラウドプラットフォームによる授業の実施状況

(1)教育連携クラウドプラットフォーム

参加団体	RegionXI、Davao City Special School, Davao City Sped School Teacher Association
Software	Slack (コミュニケーション・プラットフォーム、School Tact (ICT 教育)、マイクラスライイト(LMS)、Otter、Garage Band(Music Programming)、Google classroom、Zoom
オンライン配信機材	ATEM(スイッチャー)、DAW(デジタルで音声の録音、編集、ミキシング、編曲)、配信スタジオ

(2)「グローバルリーダー育成」、「日本語」科目 (2月・3月の実績)

「Together in Harmony」(アート・理科・社会の融合)「日本語」	12回×50分
実施授業の回数	72回×50分
学習支援者数(地域の大学生:浜松学院大学、愛知大学、横浜市立大学、明治学院大学)	29人
参加児童	のべ参加人数 550人